

[論 考]

『ファニー・ヒル』における階級・人種・ジェンダーの倒錯

吉田 直希

ジョン・クレランドの『ファニー・ヒル』(1748-49)は二通の手紙をまとめた書簡体小説である。その第一信は次のようにはじまる。

奥様

私は今から、私があなた様のご要望を絶対的な命令だとみなしていることとの間違いのない証拠をお目にかけようと思います。今でこそ愛と健康と財産の力が生み出す、あらゆる恩恵を享受できる身になりましたが、やっとのことでこの状態に達するまでのあの恥ずかしい境遇でいた時期のことを思い起こすことは、私にとってつらい義務であります。

書き出しから直ちにわかるのは、女主人公による若き日の回想と告白が手紙の内容であること、そしてこの作品が語り手ファニーの自伝的成功物語であるということである。この作品を『モル・フランダース』(1722)や『パミラ』(1740-41)あるいはヘイウッド等同時代の女性作家による作品と比較してみれば、イギリス小説史上でこの作品が示す独自性を明らかにできるかもしれない。だが、ここではまずウィリアム・ホガースの『娼婦一代記』を参照してみたい。両親の死後ロンドンに出てきたファニーがブラウン夫人と出会うシーンの挿絵としてホガースの第一図ほどぴったりくるものはない。また、第二図に現れるモルの恋人や黒人少年、ユダヤ商人、そしてモルの衣装を纏い逃げ出そうとするサル、これらはどれも『ファニー・ヒル』の作品中で姿を変えて登場する。要するに、露骨な性描写という点を除けば、両作品

にはきわめて多くの類似点があり、私たちはホガースを経由して『ファニー・ヒル』の中に当時の娼婦をリアルに読み込むことができるのである。クレランドがこの作品を執筆する時にホガースの一連の娼婦モノを強く意識していたのはほぼ間違いないだろう。

しかし、ホガースとクレランドの決定的な違いは主人公の辿る結末である。小説の結末部分で語り手は次のように述べている。

愛の力はすべての障害に打ち勝ちます。私の胸の気持ち分ってその真剣さを信じるに至ったチャールズがあくまで私を妻に迎えると言い張って聞かないので、私も彼の誠意にほだされてそれを承知しました。私がこうして彼と結婚することによって得た無数の幸福の中には、奥様ご存知のあの私の可愛い子供たちに、嫡出としての生まれを恵んでやることのできた幸福も含まれています。

よく知られているようにモルの最期は病と腐敗であって、残された息子も梅毒を患っていた。対照的にファニーはここに示されるように、健康な妻・母としてその後の人生を生き続ける。この違い、つまり奔放な性の遍歴の行末が生か死か、という二者択一によって語り手はたちまち不安定な立場に立たされる。当時の読者もまたホガースの描く娼婦モノに慣れ親しんでいたとすれば、ここでの結末はあまりにも非現実的すぎるからだ。ようするにファニーは信頼できない語り手ということになる。本稿では、この信頼できない語り手＝娼婦を手がかりに、ファニーの幸福な結婚で終わる性の遍歴の裏に見え隠れする近代的主体の転倒した「階級・人種・ジェンダー」意識の痕跡を辿ってみたい。

階級

もしも私の心にチャールズという先約者がいなかったとしたら、あるいはH氏が私の心を完全に占有することもできたでしょう。しかしその席は塞がっていて、彼は偶然な事情で私の肉体の所有者になったにすぎません。因みに彼にとっては私の肉体的魅力がその唯一の目的であり狙いであったために、それはやさしい心遣いの籠った永続的な愛情の基礎には決してなりえぬものでした。

ファニーが最終的にチャールズと結ばれる決め手は、ここに示されているように彼女が精神の美德と肉体の快楽を切り離し、その両者を融合させる権利をチャールズに与えたことである。ファニーは結局、上流階級のパトロンH氏に棄てられ、つづく第二部ではコール夫人の学園（売春宿）に身を置くことになる。もちろん、ここに見られる心／肉体の分離は自己正当化の方便にすぎない。ただし、不特定多数の顧客を相手にする公共の女^{パブリック・ウーマン}＝娼婦へと変化していくファニーが、同時にプライベートな精神をその後の人生の拠り所にしていく点は興味深い。このことを18世紀イギリスにおける公共圏の形成と結び付けて議論を展開してみると、中産階級の扱れた二面性を垣間見ることができるだろう。「開かれた社交」を促進するコーヒーハウスの繁栄は同時に、特定のメンバーにのみ社交が許される会員制クラブを次々と生み出してきた。表向きの自由な社交は、その裏で私的領域を確保する排他的な階級意識なしには成立しえないのだ。そしてこの新たなプライバシーをめぐる主導権争いが『ファニー・ヒル』以降のポルノグラフィにおいても重要となってくる。

人種

父の策略により南海の商館へと送り込まれたチャールズが植民地の問題と密接に関係していることは明白である。彼が再びイギリスに戻りファニーと結ばれるのは、おそらく南海泡沫事件によって一時的に停滞を余儀なくされた当時の経済状況の変化によるものと考えられる。ただし、そこには植民地言説の人種問題が奇妙に抜け落ちている。代わりにコール夫人の学園に登場するもう一人の娼婦ルイザと白痴の少年ディックの挿話にこの問題が転移している点に注意しておこう。ファニーとルイザは暇つぶしに近所の花売りを寝室へと招き入れ、ある実験を試みる。ホガースが「黒」を性的放縦のイメージを喚起する色として用いていたことは、たとえば『発見』など見れば明らかだが、クレランドはここで白痴＝黒人（奴隷）の性を搾取するファニーを描き出している。

私はこの少年の服の方々の隙間から透けて見える、その腿に手を触れてみました。ちょうど黒人の歯がその周囲の皮膚の黒さと対照して一段と白く見えるのと同様に、それも服の粗末さと汚れのために一段と滑らかで色白く映じます。かように衣裳も粗末で頭脳も足りない彼でしたが、・・・。

この挿話には「存在の大いなる連鎖」を攪乱する黒人と白痴の同一視、さらには両者から自らの身体（土地）に対する所有権を剥奪しようとする植民地主義的思考が反映されている。と同時に、ディックはルイザとの交わりによってはじめて性的に目覚め、ベッド上では「高貴な野蛮人」として振舞う。両者の立場はここで劇的に逆転する。本作品の結末におけるジェンダーの転倒との関係で重要なのは、搾取されるものが搾取する側に立つ可能性とそうなることへの恐怖をファニーが経験しているということである。人種差別の根

幹をなす恐怖の論理をこの作品は性的な関係によって表しているわけだ。

ジェンダー

上記の歴史的コンテクストを前提にするならば、『ファニー・ヒル』の結末における結婚も一筋縄ではいかない。たしかに、ファニーは表面的には精神的な貞節を守り通し、愛の力によって美德と快樂の融合をチャールズによって再び達成する。だがいかにして彼女は娼婦から妻へ、あるいは公共の女から家庭の女へとあっさりと変化することができたのか。前述したとおり、ファニーの見せかけの主体性の裏には上流貴族とのつながりを温存しようとする階層意識が潜んでいた。と同時に伝統的で不活性な階級秩序に対してはエネルギーな野蛮人の崇高さをぶつけ、既成の階級制度に揺さぶりをかけている。ようするにファニーは階級においても人種についてもきわめて曖昧な態度を示しているわけだ。そしてこの両義性は彼女のジェンダー意識にも如実に表れている。彼女は愛の力によってチャールズの妻になったことを繰り返して述べているが、結婚の直前にファニーが自分の財産すべてをチャールズに贈与している点を忘れてはならない。チャールズがファニーの精神に対する所有権を主張しうる正当な根拠は実はどこにもない。それを保障するのは当事者であり語り手でもあるファニー自身による承認だけであろう。したがって、ファニーが「私は最後まで抵抗したのですが、結局彼は愛の力によって獲得した私への全体的な支配権に物を言わせてそれを押し切ったのです」と語り、チャールズに全てが捕らわれたかのような身振りを見せるとき、実はファニーがチャールズの全てを捉えてしまったのである。まさにこの瞬間に売春という不当な手段によって蓄積した資産が婚姻制度によって巧みに次世代へと移譲される。重要なのは、ファニーが結婚によって、妻としてではなくむしろチャールズの幻想の父として精神を植民地化しているという点である。チャールズは実の父に疎まれイギリスを離れたわけだが、ファニー

によって再び正当な跡取りとして本国に戻ることができたわけだ。

このように『ファニー・ヒル』というポルノグラフィを通して私たちは、いわゆるポストコロニアルな主体がとりあげる階級・人種・ジェンダーの扱われた混成体を確認することができる。そしてこの転倒した主体を生み出す啓蒙主義が今日のグローバル社会において再び議論的となる理由は何か？おそらくここで私たちは、新歴史主義以降の批評の問題意識をもう一度精査し、そのイデオロギーの偽装を読み解く必要があるのかもしれない。

* 論文中の引用は中野好之訳に拠っている。

参考文献

- Cleland, John. *Memoirs of a Woman of Pleasure*. Ed. Peter Sabor. Oxford: Oxford UP, 1985.
- Nussbaum, Felicity A. *Torrid Zones: Maternity, Sexuality, and Empire in Eighteenth-Century English Narratives*. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1995.
- Spacks, Patricia Meyer. *Privacy: Concealing the Eighteenth-Century Self*. Chicago: The U of Chicago P, 2003.
- 川北稔編『結社のイギリス史』（山川出版社，2005）
- サンダー・L・ギルマン著，大瀧啓裕訳『「性」の表象』（青土社，1997）
- ジョン・クレランド著，中野好之訳『ファニー・ヒル』（ちくま書房，1994）
- ユルゲン・ハーバーマス著，細谷貞雄，山田正行訳『公共性の構造転換』（未来社，1994）
- リン・ハント編著，正岡和恵，末廣幹，吉原ゆかり訳『ポルノグラフィの発明』（ありな書房，2002）